運だけは良いあの茜沢に転生しちまったぜ

暁紅

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何も覚えてはいないが自分に前世がある事を覚えている、ハリー・茜沢・アンダーソン（見た目は女だが前世は男だったので心は男）

悲しきかな呪いのように付きまとう『幸運』は彼女にどのように影響を及ぼして行くのか・・・・

これは彼女の英雄（笑）に至る物語。

某主人公は「不幸だぁぁ!!」と叫ぶが彼女・・・ 彼は違う。

「不幸になりたい（切実）」

そんなｔｓ主人公の物語。

目　次

拉致と言うなの勧誘（相手の許可など必要なし）――――1
ケーキ争奪戦開幕。一体誰が勝ち取るのか!!――――6
真っ赤に燃えるぜハート！――――10
ストーカー恐怖の逆切れ――――15

拉致と言うなの勧誘（相手の許可など必要なし）

東京都内の駅構外。一つのテントの中に一人の女性が外の暑さに項垂れるように机に倒れている。

その女性の名は『ハリー・茜沢・アンダーソン』三十路を超えているのだが、顔は若々しく未だに高校生と間違えられたりする。

名前の通り外国人と日本人のハーフではあるのだが、髪色は真っ黒で顔つきも日本人そのもの。スタイルだけは外国人と夢の集合体のような人物だ。

何故そんな彼女がここにいるのか。それは彼女の素性に関係している。

人理継続保障機関フェニス・カルデアに所属する職員の一人で、あまりにも役に立たないので左遷され続けスカウトマンとして来ている。

表向きは献血サービスとなっているが、実は世界を救うための人員を探すための施設であったりする。

そんな彼女が未だに仕事をしない理由は

「暑い… 暑すぎる。何これ何なのこれ聞いてないよ」

「仕方ないですよ。何でも夏一番だとか」

「雪山からこれは辛すぎ… はぁ…」

ため息を吐きながら何故こんな事になってしまったのかを考え始める。

やぁ初めまして。私の名前はハリー… 茜沢さんかあかちゃんと呼んでくれ。他言は認めよう。

おっとふざけている場合では無かった。突然の事だが私事俺は転生者だ。

物心付いた時に気づいてしまった。自身が転生者なのだと。一応前世の事も思い出せる。ただ、名前や具体的な出来事は無理で浅く広くと言った感じだ。

そんな俺だが実は家が魔術師の家系だった。
魔術があれば誰でもはしゃぐだろ。あると知った当時はかなりはしゃいで魔術師にでもなってやろうかな、などと思っていたけどその夢は尽く打ち砕かれた。
なんと魔術回路が二十本しかないらしい。優秀な兄は百本以上あり天才とされていた。てか笑うよなこのせいで自由に魔術が使えねぇ。
我が家の跡継ぎは兄に決まり要らない子になってしまった俺は最終的に人体実験を受けることになる。この時の自分を殴ってでも止めたいと今でも心から思っている。
そもこの実験について語るには魔術師の目的。どうやって根源に至るかについて話せばならない。
根源に至る方法は数あり聖杯戦争?と呼ばれる物でも至れるらしい。興味がないのであまり詳しく無いけど。
それで実は我が家では『運』で至ろうとしていた。
いやけどね、偶然至るのを待つとかではなくて『運』を味方につけて至ろうとしていた。
世間一般ではこの世は金だと言っているけど実は違う。この世は『運』で出来ている。
『運』良くテストの予想が当たった。
『運』良く大金を拾えた。
『運』良く生き残った。等々
正しくこの世は『運』によって成り立っている。そう考えた御先祖様は『運』を上げる魔術を研究し続けた。
しかし、そんな物が上手く行くはずがなく二十回の人体実験も全て失敗している。
そこで諦めれば良いのに馬鹿な大人達は諦めきれずに、身内でやればどうにかなんじゃね?と安直な考えに至る。
兄は優秀で跡継ぎ。となれば残るは落ちこぼれの俺。幼き頃の俺に拒否権などは無く強引に受けさせられた。
二度目の死も早かったなと思いつめていたが『運』良くそれは成功

してしまった。成功してしまったのだ。最悪な事に・・・
『主人公補正(パッシブ・ヒーロー)』その呪いがこの身に宿ってしまった。
効果は分かりやすく説明するならば、本来ならありえない事でも俺に関しては１％、０．００００１％どんなに小さな確率でも０でなければ必ず起こししまう。
例を上げるのならばポーカーが良い。
ポーカーにおいて最強のカードロイヤルストレートフラッシュ。
手札を交換せずに起こせる確率は１／６４９７４０。普通に考えて無理と思える手札。
これを俺は呪いを受けた時から換算して１万２５６３回連続で起こしている。
奇跡の体現とも言えるこの呪い。当然周りは騒ぎ立てた・・・ なので家出した。
結論が早すぎる？いやこれ以外言い方無いんだよね。本当に家出したし。
結果としてカルデアに拾われレイシフト確率０．１％と少ない事から裏方の仕事を転々として今に至っている。
『運』は良いけど不幸だァァァ!!って叫びたくなるね。思い出せば出すほどに苛立ちはましさっさとカルデアに帰って優雅に暮らしたい。なので適当に一人拉致ってしまおう。そう決めテントから外に出る。
今の服装は胸もとのがっつり空いた黒のワンピースに、白の白衣のいかにもな格好だ。（傍から見たらただの痴女）
「ふぅぅぅーん。まぁ適当に一人を選ぼう」
道行く人々を眺めつつビビッと来る人を待つ。数秒間見ていると一人の青年が目に止まる。
足はすらっと長く顔付きもカッコイイよりは可愛い系の顔でカルデアの女職員(腐女子)達も喜びそうな顔付きだ。
うん、アイツだな。ロマニとくっつけたら面白そうだし。
「お兄ーーさん！」
「ひやっ！」
青年は突然腕に抱きつかれ変な声を上げる。茜沢は胸の谷間に腕

を沈ませ、下から見上げるように声をかける。これぞ秘技ぶりっ子。
女からは嫌われるが男からは好かれる謎の存在だ。ちなみに前世ではそのせいで地獄を見た気もする……　諭吉達……
思い返して闇の感情が出る前に胸にさらに沈め男の興奮を誘う。
青年は見事にまた変な声を上げ鼻から血を垂らしそうになっている。
くくくく所詮男はこの程度か！俺も心は男だけど
「お兄さん。お願いがあるんですけどぉ…　献血の協力してくれませんかぁ？」
「いやでも」
「お願いしますぅ…　そうしてくれないと私…　私……　クビに」
瞳から涙を零してみせる。無論演技である。男は女の涙に弱いのを上手くついた作戦だ。
「わ、分かりました。協力します！」
「ありがとうございますぅ。それじゃあこちらへぇ」
案内するのはテントの中。中もｔｈｅ献血施設のような機械などが置かれているが全てフェイクだ。
適当に椅子に座らせ注射器で血を少しだけ貰う。
「チクッとしますねぇ」
「え、はい。てかそれだけ何ですか？」
「いいえ違いますよぉ。簡単に血液型を調べるんですよぉ、最近珍しい方の人もいるのでぇ」
そう言って少しだけ頂いた血をメガネに白衣の定番研究員に渡す。
渡した血は血液型を調べる訳ではなくレイシフト率を調べる。最悪２０％超えていればいいやと思っていたが、なんと脅威の１００％日本では発見確率は０と言われていたのだが、大きくその予想を上回る結果となった。
その結果を先程の研究員から渡され見た時は呪いのせいかとも思ってしまった。
まぁいい。見つかったんだからこれで帰れる。よしやろうか。
「すみません…　もう少しかかるみたいなのでぇこちらのアイスティーどうぞぉ」

「あ、ありがとうございます！」
「いえいえ、これから大変ですから」
「？・・・ なるほど？」
謎の言葉に首を傾げつつアイスティーを一口飲み、すぐに机に頭から気絶した。
やったぜ。超強力睡眠薬入りアイスティーのおかげで無傷でＧＥＴだぜ。
完全に寝たか確認するためほっぺを数回突っつく。一向に目覚めない。
「よし・・・ 運ぼう。慎重にだよ」
「なかなかゲスい事しますね」
「いやいや、これは彼の責任だよ。親がよく言うだろ知らない人から物を貰っても食べちゃダメって。守らなかった彼がいけないよ」
「はぁ・・・ まぁいいですけど。さっさと運ぶぞ」
青年は五人の男に慎重に車椅子に乗せられ、車に乗せられ誘拐に近い形でカルデアへと送り出す。
青年強くなれよ・・・・・
白衣を羽ばたかせハイヒールで一歩を踏み出し右足のヒールをへし折り、その場に大股でパンツをモロ見せで倒れる。
近くを通りかかった職員は既に彼女のだらしなさと下品さを知っているので、見向きもせずにせっせとテントを片付ける。
もう少しリアクションしてよ!!
心からの叫びも誰にも届かない。

ケーキ争奪戦開幕。一体誰が勝ち取るのか!!

「うぅ・・・ うん」
意識が戻ってきた。
最後の記憶はアイスティーを飲んだところだ。あの後から一切の記憶が無いてか、意識もない。
重い瞼を開けると目の前には白い山があった。
「なんだこれ」
真ん中で割れているソレを掴んでどけてみる。
それは柔らかく生暖かい。全体的に白い布で覆われていて山のような形をしている。
昔触った事があったが、何なのかイマイチ思い出せない。
さらに、触った時に気づいたのだが頭からも枕とは違う感覚があった。
こちらも生暖かく、しっとりとして弾力がある。無論こちらもよく分からない。
「お?起きたね。寝起きに胸を揉みしだくって、いいセンスしてるねぇ」
「・・・・・・ うわっ!」
「突然驚かないでくれよ、あぁ性格は元からこっちだよ」
俺は胸を触っていたのだ。男のではなく女の胸を。それと後頭部にあったのは生足のようだ。
目の前にいる女性は長い髪を後頭部でゴムによって纏めていて、白ワイシャツに短い黒のスカート。
ワイシャツのボタンはこれでもかと湾曲し吹き飛ぶ寸前で、足元は長い黒のハイソックスだ。
顔は俺と同じ日本人顔だ。てか、見覚えが大ありだ。あの時のアイスティーを出した献血の人だ。
「なんだここ」
「気づいたよね、さすがに。まぁ説明するんだけどね、ようこそ人力継続保障機関フィニス・カルデアへ」

これから始まる事を踏まえればこんなものは序章に過ぎなかったと、この時の俺は知る由もない。
△△△△△△△△△△△△△△△△△△△
目覚めた彼はいきなり胸を触ってきた。まぁ男の子なのだから溜まっていたのかもしれない。よく自分でも揉むので甘んじて受けよう。
飛び起き絶叫していた彼にここに施設について説明した。突然見も知らない所に来たと言うのに、案外彼は落ち着いていて一般人なのか疑問に思う。
「何か気になる事はある？一応私の方が先輩だから、何んでも言ってきなさい」
「帰れたりは」
「しないね、無理だよ。どうしてもと言うなら、全記憶消去して貰うよ。死亡する可能性の高い手術だけどいい？」
「わかりました。ここで頑張らせていただきます」
「うん、分かればよろしい。さてといくか」
「行く？どこへ？」
「ししし、お楽しみの所だよ」
どこだろうと頭を傾げている彼の手を握り強引にある場所へ引きずっていく。
自分の部屋から出て数分歩き続ける。とある部屋の扉の前で止まる。
二回ノックをして
「入っていい？」
「はい、どうぞ。今丁度着替え」
スライドドアが開き目の前の景色は下着画像丸見えのマシュで染まる。
親指だけを上げ前に突き出し「ｇｏｏｄ」と言うと、途端に顔全体が赤くなり近くにあった本を掴みあげ投げてくる。
適当に投げているのであれば避ける必要すらない。本は横を素通りし彼の額にクリーンヒットする。

「あふぇ」
「あちゃ殺っちゃったねマシュ」
「そんな・・・ ってこの程度で死ぬわけないじゃないですか！あぁ急いでベットに」
「下着」
「こっちが先でした」
慌ただしく着替え再び眠りについた藤丸立香を抱え上げベットに横にする。

「ここは」
「すみませんでした、先輩。どこか痛いところはなかったですか？」
「いや別にないよ、ありがとう。それとごめん、覗く気は無かったんだ」
「いえ、そこは理解してます。なので」
マシュの指さした方向に立香も視線を移動させ、私の無残な姿を目撃する。
三個の薪の上に正座で座らされ、太ももの上に石の塊を五個乗せられ涙を流している私だ。
ほぼ、拷問のそれだがツンデレのマシュはこれが平常運転である。

「やはりここにいたか。急ぎたまえよ、マリーが怒ってしまうからね」
「レフ教授。すみませんでした、すっかり忘れてました。私は先輩を連れていくので後のことは任せます」
「任されてもこま・・・・・ 行ってしまったか。にしても・・・・・ どうしたものやら」
「石をどけ・・・ どけて」
「仕方ないか」
レフの協力により事なきを得たが、足への激痛は凄まじく説明会へ顔出しする事はできそうにないので、とりあえずロマンの所へ遊びに行くことにする。

レフとは早々に別れ唯一の空き部屋へと足を踏み入れる。
おおよそ、彼の部屋となるそこにはケーキの一口目を食べようとしているサボり魔がいた。
「な、なんでここが」
「考えることは大体分かるからね・・・ ねぇ頂戴？」
「いや、これはダメだ。僕が我慢して我慢した、そう簡単に渡さないよ」
「ならジャンケンは？」
「ダメだ。勝てるビジョンが見えないからね・・・ これならどうだい？」
懐から取り出したのは折りたたみ式の将棋だ。基本サボり上等のロマンはこういった娯楽道具を持ち歩いていて、一緒にサボっている時に遊ぶこともある。
今回はケーキを掛け将棋をする事になっただけだ。
「いいけど、負けても文句言わないでよね」
「もちろん。男に二言はない」
二人の熱いバトルの火蓋は切って落とされた。

「まるで将棋だね」
「そんな・・・ ちゃんと特訓してきたのに」
余裕で勝ち取ったケーキを優雅に食べる。
まぁロマンも言ってる通りそこそこ強かった。けど、所詮はそこそこだ。ゲームですら負け知らずの私程ではない。
「あ、」
「おっ立香くん、さっきぶり」
「・・・ 僕のケーキ・・・・・」
ある意味混沌の時に彼は訪れてしまう。

真っ赤に燃えるぜハート！

「と、言うわけだよ分かったかな？」
「はいまぁ」
「よしならおけだ」
今は改めて立香くんにこの場所の全てを一から説明し、何故ここに運ばれて来たのかを説明した。
よこで泣きそうな顔で見つめてくるロマンに見せつけるにケーキを食べながら。
「あの」
「ロマンなら大丈夫だよ、基本的にこんな扱いだからね」
「あ〝ぁ〝ぅぅぅぅ〝ぅぅ」
バーサークラスの適性があるんじゃないかと少し思ってしまう。
ちょっとやり過ぎたかな。機嫌取りも兼ねてこれでも渡しておかなくちゃ。
懐に手を入れ無数にある物の中から四角い箱を掴み取り出す。赤い正方形の箱の正面には白い文字で『サルでもできるケーキの元』と書かれている。
「はいロマン、これあげる」
「いい・・・ のかい？」
「うんまぁね日頃の感謝的な」
「いよっしゃぁぁぁ!!!!」
うん。聞いてないねこの甘党。ここまで殴りたいと思った笑顔は初めてかもしれない。
赤い箱を天井に掲げながら喜んでいるロマンをよそに、立香くんの方へ視線を移す。
「そう言えばなんでここにいるの？今の時間確か研修でしょ？」
「その、実は居眠りしてたら追い出されちゃっいまして」
「あーオルガ所長ならやりかねないわ」

ある意味納得する。オルガ所長はここのトップではあるのだが、いささかプライドが高すぎてしっかりと指揮することが出来ていない。
そのため、裏では『親の七光り』とまで言われている。
けど、俺的にはオルガ所長よりレフの方が嫌いなんだよな。なんか、勘だけど気に入らない。
かなりフワッフワッしているが、これでも過去ではこの感で生きてきたので何かあるだろうと踏んでいる。
ピピピピピ。
近くにあるデジタル時計からアラーム音がなる。
「ロマンそろそろ時間ぽいよ、いかなくていいの？」
「げっ、忘れてた。はぁ……行ってくるよ」
明らかに落ち込んでいる。どんだけ仕事したくないんだよ。
肩をすぼませトボトボ歩きながらドアを開けた瞬間だった、揺れるはずのないカルデアが巨大な爆発音と共に揺れたのは。
「うわっ！」
「姿勢を低くして立香くん！」
ロマンはこのような非常事態にも驚きつつも冷静に思考し、その場でうずくまってできる限りの安全体制をとっている。
しかし、彼は違う。突然色々なことが重なっていたので頭がしっかり回っていない。
姿勢をいち早く低くした俺は立香の右足を強引に引き、体制が崩れ床に倒れたと同時にその上に重なる。
自身の体を身体強化で強度を上げ、落下物から完全に守る。
「うぷっ」
「大丈夫だ安心して」
「がっ」
「どうしてそんなじたばた…　あっごめん」
咄嗟だったので気づいていなかったが、胸に顔を沈めて窒息死しそうになっていた。
胸を揉みしだく事はあっても沈めたのは初めてだったようで、耳まで真っ赤にしながら顔を両手で覆っている。

まさかこの子童貞か?最近の子供はませてるってよく聞くから、彼ぐらい顔がいいともう卒業してると思ってたけど……　この反応後で確かめよう。

と、変な事を考えている内に揺れは収まり、すぐさま非常事態を告げる館内放送が流れる。

「ロマン発生源はまさか」

「ハリーくんの思ってる通り。十中八九中央管制室だろうね」

立香くんは何を言ってるのか分からず首を傾げているが、かなりまずい事態になった。

今中央管制室では、過去へ飛ぶレイシフトの実験が行われていて、全マスターがコフィンの中に入っている。

そんな所で爆発が起こったのであればマスターの何人かが瀕死の可能性がある。

だけど、本来爆発なんて起こらないはずだったのだが…　未だ可能性ではあるが故意の可能性が浮上する。

「急いで向かおう」

「それしかないね立香くん行けるかい?」

「はい大丈夫です。それに、そこにはマシュも」

「いるさ彼女はAチーム所属だからね」

彼の握る拳の力がさらに強くなる。

さて、このまま行ってもいいが非常時の事を考えアレを持っていこう。

二人は先に駆け出し向かうさなか、ハリーだけはその場に留まり引き出しからとある物を取り出して腰に付ける。

久々に付けるので少し戸惑いながらも急いでつけ、すぐさま中央管制室へと駆ける。

二人より少し遅れ完全に姿を見失ってしまい、遅れて中央管制室と到着する。その直後目を疑う光景が広がっていた。

辺り一面焼け野原で、肉の焦げる独特の匂いや血の生臭、床に転がる肉片とまさに地獄と呼べる状況だった。

酷すぎる。こんな事普通じゃありえない。となれば、やっぱり故意

の事故だな。誰がやったんだ？
入口で立ち止まり長考しそうになったところで、慌てて首を横に振って意識を戻す。今すべきはそんなことでは無いと。
「立香くん！どこだぁ!!」
燃えさかる部屋中をハリーの叫び声がこだまする。遅れて数秒返事が返ってくる。
「こっちです！助けてください！」
「今行く待ってて！」
声のした方を向くと瓦礫が自分の身長を遥かに超える高さで積み上がり、立香の具体的な位置は分からない。
だったら、身体強化！
足に魔力が行き渡るのが伝わる。魔術回路が活性化し足に青い紋様が浮かび上がると、その場で軽くしゃがみ縮めた筋肉を一気に引き伸ばす。
数十メートルはあろう瓦礫をたったの一度の跳躍だけで飛び越える。空中で体制が崩れ着地が失敗しそうになるが、体を捻って立て直し両手と両膝をつけて着地する。
「茜沢さん、マシュが」
「これはまずいな・・・ 下がってくれ立香くん！」
「はい」
立香を見つけたのは良かったのだが、そこには巨大な瓦礫に下半身を挟まれているマシュがいた。
今回は先程のように力任せで瓦礫をどうにかする訳にもいかないので、数少ない魔術回路を全て起動させ全身を強化する。
「うがぁぁぁぁぁ!!」
推定数トンはある瓦礫を上に持ち上げ、マシュと引きはがす。
「立香くん、ひっぱりだせぇぇ!!」
「は、はい！」
「すみません先輩」
瓦礫と離れた事で簡単に救出ができ、ゆっくりと瓦礫を戻して魔術回路を閉じる。

ふぅ…　なんとかなったな、やれやれだぜ。しっかしどうしたもんかな……

ひとまずマシュを救出した事で安心しきっている二人に視線を向ける。

「二人とも聞いてくれ。今カルデアは殆ど壊滅的だ、もしこの先何かあった際は自己の判断で生き残れ。生き残れさえいればここの医療施設で治せるからね」

「何かってまだ何かあるんですか？」

「そうだね、アレを見てみて」

二人は小首を傾げながら見た方には、本来青く世界を映し出しているはずの近未来観測レンズ『シバ』が赤く染まって閉まっていた。

それが意味をするのは

「世界が消滅したってところだね」

「そんな！」

「う…　そ…　だろ…」

「これは現実だ。そして、ここでは過去に飛ぶ実験をしていた、そうなると多分強制的に飛ばさ」

最後まで言葉を綴らせること無く三人の姿はその場から消える。

これが、人類最初の人理修復であり、長きに渡る旅の始まりでもあった。

ストーカー恐怖の逆切れ

「いたた・・・ ここは・・・・・ どこ？」
辺りを見渡し変貌した風景に驚愕を露にする。
倒壊し永遠と燃え続けている民家やマンション。さらに人の声は一切聞こえず人気なんて物はない。
空が見える事からレイシフトしたのだろうと考えた。
まぁ、そのへんはどうでもいいんだけど・・・ 問題はアレだよね
瓦礫に身が隠れていたので見つかってはいないが、視線の先には動き回っているスケルトンがいた。
ボロボロの布を肩から腰にかけ、手には弓や剣など多彩な武器を持っていて、数もかなりいる。
「まぁ、試してみるか。我が雷のままに消え去れ！」
銃弾が装填されていないリボルバー式の拳銃を懐から取り出す。
これは、自作の特性銃であり市場にはまず出回っていない代物である。管制室へ向かう時に持っていったのは銃であった。
この銃は魔力を弾丸とし放つ事ができる。ただし、その場合は威力はそこそこしか出ず火力不足なのだが、彼女は詠唱を加える事でとある効果を付与している。
それは『死』である。死霊魔術とはまた少し違う分野ではあるのだが大雑把に言えば同じである。
どんな生物であっても必ず訪れる『死』相手が生きてさえいれば強力な武器になるのだが、案の定スケルトンは放たれた電撃を受けてなお立っていた。
「やっぱり無理かー。よし逃げよう」
魔術回路を活性化させ身体強化の魔術を使用する。
足や手には青白い模様が浮かび上がり、魔術の起動が成功した事を表した。
その場で少しかがみ、瓦礫を砕くように瞬間的に加速しその場から離れる。

スケルトンはすぐに追いかけようとするが彼女の加速に追いつけるはずもなく次第に離されていく。
倒壊しかけのビルや一軒家の天井を伝うこと数分。スケルトン達が完全に見えなくなったところで、一軒家に忍び込み探索を開始する。
最悪何かしらの情報を手に入れたいと思いながら物色を始める。

「むむむ麦茶しかないな、でもいいか」
一通り物色を終わらせ最後にキッチンへと訪れ、疲れた喉を癒すために冷蔵庫を物色。見事麦茶を発見し文句をこぼしながらコップに入れ飲む。
倒壊などし電気は止まっているのだが、幸いな事に腐っている物はなく安心して麦茶を飲めた。
「なるほどね、ここは冬木市か・・・ 確か第五次聖杯戦争の場所だっけか？日付は知らんけど、聖杯が関わってるのは確定だろうね」
何故第五次聖杯戦争の事について知っているのかは、ロマンの部屋に侵入した際に資料を見つけたからである。
ちょうど出払っているタイミングを見計らい侵入した。
理由はエロ本だったので、ありそうな机の引き出しの二重底の下にシャーペンの芯を使い、やっとの事で取り出したのがその資料だった。
まぁ、つまらないので軽く見てから何事も無かったように戻したので、深く情報は知らない。
「・・・・・ そこに、隠れているのは誰だ？」
長い長考をしてこの後どうしようかと考えている時だった。勘としか言えないが何者かに見られている気配を感じたのは。
「はっはは、まさかこの私の気配を感じ取るとは」
「いや、ほんと誰？」
物陰から現れたのは全身を黒い布で覆い、白い仮面をつけている不気味な男だった。
マジで知らねえよ。不審者にも程があるだろ。

「ストーカーですか？」
「す、ストーカー！この私が??そんなわけがないだろう！」
「おっ、おう」
「くっまぁいい・・・　ここでお主には死んでもらうだけだ」
「チッ、めんどうな！」
　男はどこからともなく銀色に輝くナイフを取り出し、投擲を行う。それも、喉、目、心臓、両足を狙った正確なコントロールで。
　悪態をつきながら唐突な戦闘に瞬時に反応し全身を強化する。
　肉を抉ろうとする五本のナイフを右回し蹴りで砕く。
「ふぅ・・・・・　憤ッッ!!」
　息を一旦整えてから瞬時に加速し懐へと飛び込む。
　無論男も無抵抗で懐に入らせるわけもなく黒い布をはためかせる。すると、どこからともなくナイフが飛翔する。
　飛んでくるナイフを回避するため、近場にあった机を蹴り上げ盾代わりにする。
　ナイフが大量に机に突き刺さり、針山のようになる。
（右か？左か？それとも上か？）
　男は机に姿を隠したターゲットがどこから来てもいいように全神経を尖らせ待ち構える。
　実は男はサーヴァントでありクラスはアサシン。そのため正面戦に関しては人間に劣るところが多々あり、不意打ちが失敗した時点で勝率がガクンと落ちている。
　致し方なしと、右手の包帯に手を伸ばし宝具の解放の準備をする。
　のだが一向に現れる気配がない。いや、机の裏からも気配を感じない。
「まさか」
　慌てて机の裏を除くとそこにはターゲットの姿はなく、後ろの壁に人一人通れるぐらいな穴が空いていた。
　このままターゲットを逃してなるものかとその穴から外に飛び出て、感覚を頼りに追いかける。

それから数分後。物音がならなくなったのが分かると、机の盾のすぐそばにあった床下への小さな扉が開き這い出るように茜沢が出てくる。
「危なかったな。偶然ここに床下があって良かったよ」
彼女は机で盾を作った時、背後の壁を破壊しそこから逃げるのではなく、床下へと飛び込んだのだ。
かなり大きな賭けであったが、見事暗殺者は騙され外へ出ていった。
命は助かりひとまず良かったのだが、暗殺者は見事に大きな爪痕を残した。
「服がボロボロ・・・ 着替えなきゃ」
掠ったナイフや壁の破片などで服がボロボロに破れ、元から多少あった露出がより過激になっている。
何か着替えるものはないかとタンスを探すと出てきたのは、ジャージだけだった。きっとここに住んでいた人は何かしらの部活に所属していたのであろう。
サイズ的に着れなくは無かったので渋々それを着る。
ワンピースのした部分を破り捨てて、タンクトップのようになったところでジャージを羽織る。
チャックを上に上げるも、無料胸元にある爆弾がはみ出しチャックが上まで上がらないので、胸のした部分までチャックを閉める。
下はもちろんジャージのズボンを着る。
これまでお世話になった白衣を折りたたみその場に置いてから、家を後にした。